宗の当時首座にあった悦峯が、祐天を尋ねその道名に敬服し書までしたためたというその事実であろう。

第五項　家宣と祐天

綱吉亡きあと、政治改革を進める家宣は祐天にどのような思いを持っていたのであろうか。先にも述べたが、門周は宝永七年に一度家宣に辞意を表明している。しかし、このときは家宣は特に祐天を増上寺に登らせることを考えてはいなかったようである。しかし、常憲院殿の三回忌（宝永七年十月十日結願）、桂昌院の七回忌（正徳元年六月十九日結願）（『文実記』）が終わると、家宣は門周に辞職を促し（「縁山志」前出）、祐天を即席大僧正として取り立てたのである。破格の待遇であることは言うまでもない。

倹約を旨とする家宣の政策上、表向き祐天とのかかわり合いは『文実記』には少ない。残念ながら、家宣は、翌正徳二年十月十四日薨去し、表面上のつながりに関しての資料はほとんどないと言って良い。しかしながら、家宣のため

馳使乎増上寺大殿之中別所奉安阿弥陀佛像［割注］倚像　高一尺六寸世称
黒本尊者是也」請入之於営中

（『略記』）

し、葬送の大導師を勤めるに至ったと記述する（『略記』など）。

家宣は遺言を書いている（『文実記』正徳二年十月十四日）。そこには理路整然と自分を増上寺に葬るように記しているのである。それは三代以降はまだ日が浅いので忌日を忘ることはないと考えられるが、

近代の　祖各上野に葬て。増上寺は逐日詣る人も多からず。然る時は百年に及び。台徳院殿忌日を忘るゝ人も多かるべし

との理由による。この遺言状にも表面上は浄土教的思想は見受けられない。しかし、この遺言状を記すという行為そのものに、この世に未練を残さず真っ直ぐ浄土に行く心構えを作ったのかもしれない。

ともあれ、家宣の大導師は祐天に命ぜられたのである（『文昭院殿御新葬記』）。これまで増上寺の大僧正といえども将軍の導師を勤めることはなかった。しかしながら、仏縁と言うべきか、知恩院門跡法親王は正徳元年五月に薨去しており、このときは法親王の位は不在であった。誠に異例のことと言わねばならないが、おそらくは、将軍家の人々は迷わず祐天に導師を言い渡したに違いない。

表面的には出ないが、祐天に対する格別なる待遇を見れば、家宣と祐天は精神的には深く

結ばれていたと考えることができる。このような信仰はいつ芽生えたのかということになると、推定にしかすぎないが御前法門に祐天が呼ばれその問答を聞いていくうちに、また綱吉が護持院らの祈祷寺に対し破格の優遇措置をしていたことが、倹約家の家宣にはどうしても納得することができなかったためであろう。また、先の『大樹帰敬録』に見られるような家康の信仰に強く共鳴を覚えたことも一因であろう。それは、取りも直さず祐天の拝領物などを決して私物化せずに寺院の復興などに回す無執着の姿勢や、その明解な教義に対して深く崇敬の念をもって見ていたことによると言っても過言ではない。

言ってみれば、徳川家の信仰を黒本尊に再度向けさせたのは、祐天の最も大きな業績であり、事実上、浄土宗を衰退から守ったと言えるであろう。

『文実記』によれば、家宣は正徳二年九月二十三日病に臥した。そして黒本尊を営中に請入したのは十月に入ってからであった。

往日対(シテ)二近臣間部越前守詮房一(ニ)有一苦口(ノ)勧諫一顧(フニ)亦有(タルカ)レ容(ルルコト)レ詞(ヲ)歟故迎(ニ)レ之祈(ヘテ)二(タマハルノミ)臨終正念之加祐(ノ)一(ヲ)耳

（『略記』）

伝記でも、前に祐天が家宣の近臣に黒本尊の来由をていねいに伝えたのが、家宣の耳に入り臨終に向かって黒本尊を側に置いたのであろうとしているが、推測の域を出ていない。し

かし、家宣が最後に黒本尊を請じたことは事実として捉えうるであろう。そして、十四日その日を迎えたのである。

家宣の葬送の様子は、増上寺に現存する『文昭院様御新葬記』の安政五年の写本に詳しく記録されている。この原本はもと祐天寺にあったことが記されているが、原本の存在は確認されていない。

本書によれば、十四日七時申中刻に通達があり、申下刻には祐天も登城し、遺言にて尊号を浄土宗で、導師を祐天にすることなど申し渡されている。十七日に尊号と祐天の名号ならびに血脈が納められ、二十日に出棺となった。

葬儀式に読まれた祐天の引導を記し、祐天の人柄を知る一助としたい。

御導師下炬

増上寺三十六世

大僧正顕誉祐天 七十六歳

夫我弥陀以レ名接物是以耳聞口誦無辺

聖徳攬二入誠心一爰

大将軍順蓮社清誉廓然大居士奇哉始

入二本願他力之大道一頓證二廓然大悟之

無證證已於生死岸頭得大自在六道四生
遊戯三昧矣
于時正徳壬辰年十一月二日酉刻

このとき、月の周りを星のような白い玉が回るという奇瑞が多くの人に目撃されている（『有実記』、『文昭院様御新葬記』、新井白石『折たく柴の記』岩波文庫、一七七頁）。

第六項　将軍家と祐天

家宣亡きあとも、幼い将軍家継を巡る人々の信仰は祐天に向けられた。

家宣が薨去し、綱吉のときと同じようにその正室らが落飾した。そのうち、天英院（家宣正室）と月光院（家継生母）のことが伝記に登場する。

法会開白の翌日、正徳二年十月二十一日形ばかりであったのかどうかはわからないが、天英院も月光院も落飾し院号を名乗った（『有実記』）。しかし、月光院は本当に落飾したいと思っていたのである。以下に述べるように桂昌院以来、祐天への信仰は確実に奥の人々に継承されていたのである。